特集 フィリピン台風30号被災地に、医師・看護師を派遣

～ 石根周治医師、村上悠也看護師がレイテ島・サマール島へ ～

去る2013年12月19日から1週間、国際医療ボランティアAMDAからの要請により、福山市医師会を代表して、脳神経センター大田記念病院の石根周治医師（救急部長）と、村上悠也看護師（5階病棟）が、フィリピン共和国南部にあるレイテ島とサマール島で、医療救護活動を実施しました。

■ 災害発生から40日後の現地は…

強い勢力をもった台風30号は、11月8日レイテ島付近に上陸。近隣の島々も含め、強風と高潮の影響で被災者1,600万人、死者6,201人、行方不明者1,785人、倒壊した家屋は114万戸（NDRRMC発表、1月14日現在）と、甚大な被害をもたらしました。

災害発生から40日。石根医師と村上看護師が目にした現地は、台風の爪痕が未だ鮮明に残る状態だったといいます。「少しずつ復興が進んでいましたが、まだテントで暮らす人もいました。建築資材が不足しており、屋根にはブルーシートが目立ちます」と村上看護師。かつての暮らしが戻るまでには相当の時間がかかりそうです。

▲ 少女の足の治療を行う石根医師（左から2番目）と、村上看護師（左）

■ 3カ所で臨時診療所を開設

12月19日、AMDAメンバーらとマニラ入りした石根医師、村上看護師は、現地でモンゴル、フィリピンの医師・看護師と合流し、17人の「国際救護支援チーム」を結成。空路、海路、陸路でレイテ島に移動しました。1週間のうち、移動を除くと医療活動ができたのは3日間。レイテ島・オルモック(21日)、サマール島・バセイ(22日)、サマール島・マラブット(23日)の3カ所で臨時診療所を開設し、希望者を対象とした診察と治療を行いました。

石根医師は「もともと塩分、糖分共に多い食生活から、高血圧の人が多かったところに災害が襲い、身体状況が悪化した人や、災害による心的外傷(PTSD)により雨が降ると泣き叫ぶ子どもたちがいました」と現地での診察を振り返ったうえで、「現地の病院も復旧が進まず、十分な医療が提供されていません。時間が経過しても忘れず、継続的な支援が必要だと思います」と話していました。

▲ 臨時診療所となった地域の集会施設に続々と集まる人々。

▲ 屋根の被害が甚大。風の威力がすさまじい。

▲ 臨時診療所では、まず看護師が体重や血圧を測り、医師に取り次いだ。

▲ 診療所に来れない人を対象に訪問診療も実施。

▲ 診察する石根医師。子どもたちの栄養失調も気になったという。

●いずれの写真も、AMDA提供

福山で「フィリピン台風30号復興支援会議」開催

台風30号の復興支援に向けた討論と、将来起こりうる南海トラフ大地震では、今回と同様の災害が予想されることから、支援活動の経験や課題を共有することを目的とした会議が開催されます。当日は、石根医師、村上看護師も現地医療支援についての報告を行います。

■と　き／2014年4月26日(土)13:30～

■ところ／まなびの館ローズコム・中会議室
（福山市霞町1丁目・福山市立中央図書館階上）

■共　催／福山市医師会、特定非営利活動法人AMDA

【参加申込・問い合わせ／AMDA 086-252-7700まで】